体育研究科（MC）インターンシップの新設

中川 昭
体育科学系助教授

開設のねらい

修士課程の大学院である体育研究科では，社会に出て活躍できる高度な職業人の養成がその目的とされている。しかし，実際のカリキュラムは，体育学の研究者養成を目的とした東京教育大学時代の研究科の影響を受けてか，高度職業人養成という目的に十分答えた内容になっているとは言い難い。この問題の解決に向けて，現在，体育研究科ではプロジェクトを組んで抜本的な改革を行おうとしており，今回のインターンシップの新設はその先駆けとも言える試みである。

一方で，学生は本学の運動部に所属しコーチやトレーナーを行うなど，様々な形で将来の職業を意識した専門的活動を授業外で行っていることも事実である。今回授業科目としてインターンシップを開設したもう一つの意図は，このような学生の授業外の活動をより意義深いものにするために事前計画と事後評価（報告）を行わせ，そして一定水準にあると評価される活動に対して単位を認定しようとする試みでもある。

履修のプロセス

インターンシップは，平成14年度より，体育方法学，コーチ学，健康教育学，スポーツ健康科学の各専攻ごとで開設され，特別実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（インターンシップ）という授業名になっている。履修年次は1年次2学期，1年次3学期，2年次1学期で，それぞれで1単位が与えられる。

履修のプロセスは表1のとおりである。実習先の選定は指導教官と相談の上，学生自らが行う。学生は10コマ分（75分を目安にして10回）の実習計画を立て，実習を実施する。実習後，実習の記録と報告書（800字5枚）の提出が求められ，これらの書類と実習先の責任者による評価を基に，研究科内の評価委員

会が単位の認定を行うことになる。

受講状況

初年度の受講状況は表2のとおりで，のべで36名の学生が実習を申請し承認された。ただ，2学期の状況を見ると，約3割にあたる学生について単位が認定されていないが，これは最後の実習報告書の提出がなされなかったためである。

表1　体育研究科インターンシップ履修の手続き

オリエンテーション
↓
実習先の選定
↓
実習計画書の提出
↓
実習の承認
↓
実習の実施
↓
実習記録・実習報告書の提出
↓
単位の認定

表2　平成14年度のインターンシップ受講状況

	2学期		3学期
	実習承認	単位認定	実習承認
体育方法学専攻	3名	3名	2名
コーチ学専攻	19名	12名	8名
健康教育学専攻	1名	1名	2名
スポーツ健康科学専攻	0名	0名	1名
計	23名	16名	13名

初年度の実習先は表3のとおりで非常に多岐にわたっていることがわかる。実習内容としては，体育方法学専攻ではスポーツクラブやイベントでのマネジメント業務の実習，コーチ学専攻では学校，地域，商業クラブなどでの指導実習，健康教育学専攻およびスポーツ健康科学専攻では病院や公的施設での健康指導の実習が主なものであった。

表3　平成14年度のインターンシップ実習先

＜体育方法学専攻
日本テレビフットボールクラブ
かしまスポーツクラブ
自由時間デザイン協会
おとなも子どもも遊びのまちだ展実行委員会

＜コーチ学専攻
筑波大学蹴球部
筑波大学男子バスケットボール部
筑波大学女子バスケットボール部
拓殖大学男子バスケットボール部
中京大学付属中京高校サッカー部
筑波大学付属高校サッカー部
富山県立富山工業高校野球部
新潟県立湯沢高校陸上競技部
牛久市立下根中学校女子バスケットボール部
山梨県東村山郡中山町サッカー協会
幼少年キャンプ研究会
タップスイミング筑波学園スクール
オープンスポーツスマイルクラブ

＜健康教育学専攻
小出クリニック
愛知県額田郡幸田町保健センター
つくばウエルネスリサーチ筑波支援センター

＜スポーツ健康科学専攻
則武内科クリニック

実習の反応

実習報告書からインターンシップに対する学生の反応を窺うと，一様に学生は実習を非常に有意義なものであったと評価していることが認められた。例として，報告書に書かれた学生のコメントを下に示す。

「・・・インターンシップ研修で感じた諸々の問題は，xxクラブ特有のものではなく，どこのクラブにおいても同様の問題が起こりうる。本研修内容は，今後，自分が総合型地域スポーツクラブを立ち上げる際の大きな参考になりうるものであった。(体育方法学専攻)」

「・・・今回のインターンシップの指導では指導者としての立場で非常にいい経験ができたと実感しています。今回の現場での指導で自分が選手としてサッカーをすることと指導者の違いを痛感することが出来ました。・・・(コーチ学専攻)」

また，受け入れ先の反応も概ね肯定的であった。特に，実習を通して実習生が現場へ貢献しくれたと，謝意を表すコメントも多く見られた。

今後の課題

以上，体育研究科におけるインターンシップの試みは概ね順調な滑り出しであると言えよう。しかし，このインターンシップをさらにより良いものにするために，今後，次のような課題に取り組んでいく必要がある。

1．それぞれの専攻で期待される職業を具体的に明確に示す。
2．インターンシップの受け入れ先として，いくつかの企業や組織体と大学が提携を結ぶ。
3．半年や1年のような長期のインターンシップ制度を導入する。

(なかがわあきら　ラグビーコーチ論)